Japanese Association of Russian Scholars

ロシア語ロシア文学研究 31（1999）

プーシキンの作品にみる人間形成について

――タチヤーナ・ラーリナとタジートを中心に――

杉　野　ゆ　り

人間心理の優れた洞察力の持ち主であるプーシキンは，成長期における人間形成のプロセスに深い関心を抱いている。彼の作品と草稿には，主人公の家庭環境や生育歴に関する叙述とエピソードが少なからず存在しており，それぞれが作者の教育思想の一端の現れであり，主人公の将来の人格と運命への示唆，先行作品へのレミニッセンスと論争など奥深い背景を宿している。例えば，『オネーギン』では外国人家庭教師に向けられた揶揄と主人公を生んだ同時代の貴族社会の教育への批判，『大尉の娘』では農奴の傅育係による教育をめぐるフォンヴィージンとの隠れた論争，[1] またロシア人貴族の女主人公たちの読書好きの傾向によって彼女らの自立した精神を示していることなどである。[2]

本稿では，まず『タジート』の主人公タジートと『オネーギン』の女主人公タチヤーナが家族及び共同体から切り離された孤独と疎外感の中で登場し，しかも同じ比喩で表されている共通点を指摘する。さらに，タチヤーナが成育環境において親の影響から遠ざけられることにより貴族の娘の標準的な成長プロセスを辿っていないことを明らかにして，人間尊厳の根幹である個性は社会規範や制約から解放された自由と主体性の中で生まれるというプーシキンの特徴的な思想を，両主人公の人間形成の背後に読み取ってみたい。加えて，タジートの生い立ちに里子制度が適用されていることの意味について，親の影響力の排除という新しい解釈を提供する。

1

最初に，タジートとタチヤーナの家族及び共同体における孤独と疎外感がどのように描かれているか，見てみよう。

1829-30 年に書かれた未完の作品『タジート』から始めるが，まず主人公の人物像について説明しておきたい。物語半ばで中断された清書稿と作者があらすじとして残した 14 項目のプランを比較すると以下のようになる[3]――コーカサスの山岳少数民族出身の主人公タジートは，13 年間の里子生活の後，生家

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

に戻ってくるが，出身社会の野蛮な風習や掟とは異なる思想の持ち主に育っている。彼は，血の復讐を信奉する父親ガスープの期待に沿って兄の復讐を遂げることができず，父親から勘当される。その後タジートが愛する娘の父親に結婚を申し出る場面まで，即ち第8項目までが清書稿に描かれている。娘の父親からも結婚を拒絶されて出身社会から去る第9項目は草稿に残されており，草稿はそこで終わっている。プランの第2項目「チェルケス人のキリスト教徒」と第10項目「宣教師」から判断してタジートがキリスト教信者になるという仮説もあるが，[4] 清書稿と草稿にタジートがキリスト教信者であることを示唆する箇所はなく，タジート即キリスト教信者とは断定できない。但し，ハンムルザーエフが指摘しているように，父親に対立する進歩的な意識の持ち主であるタジートの人物像は作品で十分明確に描かれており，[5] 彼が，出身社会の規範とは相容れない思想を持つ故追放される異端者であることは確かである。

作品で，タジートは養育者の老人に導かれて初めて父親と読者の前に現れる。老人はタジートの兄を葬って悲しんでいる父親に以下のように語りかける。

13年前のことだった，
おまえがよその部落にやって来て，
私に弱々しい赤ん坊を預け
この赤ん坊を勇敢なチェチェン人に
育てるようにと言ったのは。
おまえは今日一人の息子を
あまりにも早く失った。
ガスープ，運命に従順であれ。
もう一人の息子を連れてきた。
ほらこの男だ。おまえは，彼の逞しい肩に
頭を下げるがいい。
おまえの損失をこの息子で補うがいい。
私の骨折りはおまえ自身が評価すればよい。
自慢しようとは思わない。 (V，73)

カフカースの山岳少数民族の里子制度が作品に反映していることは，民族学的見地から既に明らかにされている。[6] 上記の引用では，老人の言葉「私の骨折りはおまえ自身が評価すればよい」が曖昧で，タジートの教育の中身について何も伝えていないことに注意してほしい。後にガスープは「俺が息子を見抜けなかったのか，あるいは老人が俺をだましたのか」と自問し，老人による教

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

育の内容を計りかねている。作品世界でタジートが里子であったことの必然性については本稿の終わりで述べることにして，生家に戻ってきてからのタジートの孤独な様子を見よう。

しかしタジートは
相変わらずうち解けない性格であった。
生まれ故郷の部落にいながら（Среди родимого аула）
他人のようであった――彼は一日中（Он как чужой）
山にひとりいて，黙ってぶらついている。
家屋で飼われているシカのように（Так в сакле кормленый олень）
いつも森を見つめては，茂みの中へ入っていく。 (V，73)

「生まれ故郷の部落にいながら／他人のようであった」という比喩から，タジートが緊密な人間関係の中にいるよそ者であり，また「家屋で飼われているシカ」という比喩から，彼が人々の中にいる動物のように異質な存在であることがわかる。タジートは，出身社会において疎外感を抱き，孤独な存在である。

人々の中で孤独なタジートは，社会の外側に広がっているもっと大きな世界，自然に心惹かれる。

彼は絶壁をつたい，石ころだらけの小道を這って
大声をあげる嵐の音や底無し淵の波のうなりを
聞くのが好きであった。
彼は時々夜遅くまで
山を見下ろしながら，手に頭をもたせかけて
不動の姿勢でじっと遠くを見つめ，
悲しそうに座っていた。
どんな考えが彼の頭の中を去来しているのか？
そのとき彼は何を望んでいるのか？
若者の夢はこの世界から
彼をどこへ連れ去っているのか？…
それは決してわからないこと。心の奥底は見えないもの，
空を吹く風のように
若者の瞑想は気ままなもの…… (V，73-74)

タジートは，そそり立つ絶壁やうなり声をあげる嵐，底無し淵のとどろく波など，人知の及ばない闇の力に支配された荒々しくて激しい自然に惹かれてい

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

る。プーシキンは，若者の心が風のように自由であること，心の奥底はわからないことを歌って，タジートが何を求め，どこへ行こうとしているのか明らかにしていない。また，なぜタジートが父親と違う価値観を持つに至ったのかも不明であり，ベリンスキーが述べているように，タジートの意識と行動原理は社会生活によってではなく，何か生まれつきの本能によって支配されているかのようである。[7]

タジートの，人間の制御を越えた荒々しい自然への憧憬は，異端者の彼が内面に宿している激しい未知の力を象徴しているかのようであり，彼は自然と交感する中で共同体社会の掟や規範から解放され，それらを凌駕する世界観を育むのである。

次に，『オネーギン』の女主人公タチヤーナの孤独と疎外感を見てみよう。グコフスキイとメイラフが指摘しているように，タチヤーナは家庭にあっても近隣の地主貴族の社会にあっても孤独な存在である。[8]

タチヤーナが初めて登場する場面で，プーシキンは妹オリガの美しさと魅力を紹介してから，彼女を「どんな小説にでも見つかるはず――それは大変かわいい。かつては私も好きだったが，つくづくいやになった」（VI，41）と退け，本命のタチヤーナに移っている。広く流布した女主人公の典型的なタイプであるオリガとの対比の中でタチヤーナが導入されることにより，後者の特異性は効果的に浮き彫りにされる。続くタチヤーナの紹介は，トルビンが指摘しているように，すべてネガティヴな印象で始まり，[9] 彼女が「人の目を惹くことがない」娘であることが語られる。この導入部に見られるのは，女主人公の与える第一印象を否定的に描くという，従来とは違った逆説的な方法であり，女主人公の容貌と性格の美点を数え上げるのではなく，内面に潜む固有の精神性を暗示するという発想の逆転である。オネーギンがレンスキイに語る言葉「僕が君のように詩人だったら，タチヤーナを選ぶ。オリガの顔には生命がない」（VI，53）とは，詩人自身の意見表明でもある。[10]

ところで，先に示したタジートの家族及び共同体での孤独が，6-7年を隔てた作品であるにもかかわらず，極めてよく似た表現で，『オネーギン』のタチヤーナについても描かれていることに注目したい。

かくして彼女はタチヤーナと呼ばれていた。
彼女は妹のように，美しさと
紅みをおびた初々しさによって

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

人の目を惹くことがなかった。
森に住むダマシカのように怖がりで（Как лань лесная боязлива）
内気で物悲しく，おとなしく
自分の家族の中にあって（Она в семье своей родной）
もらわれてきた娘のようであった。（Казалась девочкой чужой）
彼女は父にも母にも
甘えることができなかった。　（VI, 42）

タジートが「家屋で飼われているシカ」に喩えられたように，タチヤーナも「森に住むダマシカ」に喩えられて人々の中では異質であり，タジートが「生まれ故郷の部落にいながら／他人のようであった」ように，タチヤーナもまるで「もらわれてきた娘」の如く，つまり『書簡体小説の断章』や『スペードの女王』の主人公リーザたちが養家にあって常に居心地の悪さを感じていたように，家族の中にあって打ち解けない存在である。「父にも母にも甘えない子」であるタチヤーナは，両親との関係から一歩身を引いて孤独感を漂わせている。このように，タチヤーナの孤独と疎外感は，タジート同様，「家族のなかにいる他人」及び「人間集団の中にいる動物」という二つの比喩で表されており，両主人公とも，最初の登場場面で，家族という本来親密なはずの集まりで孤立した強い個性として描かれている。

2

ところで，タチヤーナは，両親との間に心理的距離があることに加えて，世間のしきたりが要求する女らしさ，令嬢らしさの行動基準からも遠ざけられている。この点を『オネーギン』から読み取ってみよう。[11] タチヤーナが，女性の日課である刺しゅうには興味を持たず，人形遊びをしないことは，彼女の人間形成の観点からきわめて重要である。

彼女のかぼそい指は
針を持ったことがなかった，刺しゅう台に
かがんで，絹糸で布地に
生き生きとした絵を描くこともなかった。
子どもは従順な人形相手に
礼儀作法を，即ち世の掟を
遊びながら身につけていくもの

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

自分の母親のお小言を
しかめつらしく人形に繰り返したりして
支配しようという欲望は現れてくるもの。

しかし，その年頃にさえタチヤーナは
人形を手に取らなかった。
町のうわさや流行について
人形と話をすることもなかった。 (VI, 43)

まず，タチヤーナが刺繍をしない令嬢であることに注目したい。プーシキンの作品ではタチヤーナ以外にも，『ロスラーヴレフ』のポリーナが「家でカンヴァスに犬ころを刺繍する」と軽蔑的に言って，女性の忍従の象徴であるこの仕事を，ナポレオン戦争について男性と議論できる自由に対置させている。プーシキンが女性の人権に関してどんな思想の持ち主だったかは別の研究課題であるが，刺繍を女性の人格に関わる本質的な魅力と考えていなかったのは明らかであり，女らしさを示す一般的な属性である裁縫する姿を[12]タチヤーナから敢えて省いているのは特筆に値する。

さらに，タチヤーナが人形遊びをしなかったという詩行も意味深長である。母親の言葉・振る舞いを人形相手に繰り返しながら次第に礼儀作法や社交術を身につけていく人形遊びとは，貴婦人になるための準備教育でもある。貴族の娘にとって教育とは，将来の社交界でのデビューに向けた花嫁教育が第一の目的であり，最も身近な生き方のモデルである母親がしばしば大きな役割を果たしている。

ちなみに，『オネーギン』のタチヤーナに続くロシア人貴族の娘を女主人公とする4作品——『ピョートル大帝の黒奴』『別荘の客』『百姓令嬢』『ドゥブローフスキイ』——では，女主人公は母親のいない片親家庭で育っており，娘の教育における母親の不在という共通の特徴がある。[13] 4作品で，女主人公たちの考え方や行動で比較的自由裁量が大きいのは，母親の干渉・監視がないという成育環境によっても納得できる。[14] プーシキンの作品では，貴族の娘のみならず庶民の娘でも母親がいない女主人公たちが多いが，これに関するペトルーニナの指摘——「世話好きで要求が多く，優しい母親の保護の欠如」——は，作者の創作意図をついた，うがった見方である。[15]

『オネーギン』の他上記4作品の特徴である，母親の娘の教育に対する影響力の排除には，人間の可能性の自由な発展を阻害する画一的な令嬢教育に対す

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

る作者の批判が感じられる。[16] この批判は，『百姓令嬢』で語られる叙情的逸脱に表現されている。

> きれいな空気と庭園の林檎の木陰で，成長している田舎の令嬢たちは，世の中と人生の知識を本から吸収する。孤独と自由と読書は早くから彼女たちの中に，注意散漫な都会の令嬢にはない感情と情熱を発達させる。〈…〉上っ面しかみない観察者の冗談が，彼女たちの本質的な美点を打ちのめすことはできない。美点で大事なのは，性格の特性であり，個性なのである。ジャン・ポールの意見によれば，それなくしては人間の偉大さというものは存在しない。都会の女性たちは，おそらくもっとよい教育を受けているかもしれないが，世間ずれしていることがすぐに性格を均してしまい，帽子と同じように精神を一様にする（VIII，110-111）。

ここでプーシキンは，孤独と自由と読書によって育てられた田舎の令嬢の方がよいという彼の持論を展開しながら，世間の慣習が都会の令嬢の性格を均一化してしまうことを嘆いている。彼は，人間――男女を問わず――の尊厳を成しているのはかけがえのない個性であり，世間一般の価値観やしきたりに合わせた標準的な教育は概して個性の発達を阻害するものであり，個性は，社会規範や様々な制約から解放された孤独と自由によって，即ち異端であり主体的であることにより形成されると考えている。

タチヤーナが両親との間に心理的距離がある子供であり，中でも生き方のモデルである同性の親の影響から逃れていることは，彼女が貴族の娘の標準化された成長プロセスを辿っていないことを示唆している。家族からの心理的な分離によって生じたタチヤーナの生活の空白に入ってきたのは，すでに何度も指摘されてきたように，自然の営みと健全な倫理感覚に基づくロシアの民衆文化，並びに17-18世紀のヨーロッパ文学を基調とする豊かな読書であり，これら二つの外側からの要素が，タチヤーナを凡俗な地主貴族の娘の枠を越える意識と精神の持ち主へと成長させる。もちろん，古き良き昔の習慣を守っているラーリン家の雰囲気が，民衆文化を吸収するタチヤーナの魂の成長に寄与したことは作品から読みとれる。また，彼女は，最終的に母親の願いを聞き入れて周囲が納得する相手との結婚という当時の大多数の女性と同じ運命を選択しているが，後に人生の変遷を経て輝きを増したタチヤーナの高潔な人間的本質は，その昔，少女時代に，叙情的な農村風景に囲まれた孤独とその中で育まれた瞑想と読書に端を発していることを，読者は作品の流れから容易に理解する。

以上のように，プーシキンは，タチヤーナが両親との間に心理的距離がある

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

ことで社会規範の体現者である親の影響から免れ，彼女が属する共同体社会の意識や行動様式の規範から解放され，独自の精神発達を遂げた女性であることを作品の中で示している。

3

タジートが，タチヤーナ同様，最初の登場で共同体社会から疎外された孤独な存在として描かれているのは，既成概念として定着した意識や思想，様々な文化基準を越える大胆な発想と思考力が，異端者であるこの主人公に不可欠だったからに他ならない。社会から距離を置いてこそ養われる物事の本質を見抜く冷徹な視点とより広い世界観は，人間の個の確立を促す。そこで，プーシキンは，古今東西の文学作品で主人公の状況設定がしばしばそうであったように，世代から世代へ社会規範を伝えて最小単位の教育の場となっている家庭から，タジートを切り離している。タチヤーナから従来描かれたことのなかったような個性的な女主人公を創造し，タジートに異端者を予定していたプーシキンは，それぞれの物語展開の早い段階で，家族と共同体から両主人公を切り離し孤独と疎外感の中に置いている。これにより，両主人公が共同体の規範や文化的制約の枠組を越えて新しい視点を獲得し，そこから世界と自己を理解できる希有な人格に発展することを作者は暗示している。

以上述べたことを考慮して，最後に，作品世界におけるタジートが里子に出されたことの意味を探ってみよう。この点について触れているのは筆者の知る限りでブラゴイ，レルネル，ハンムルザーエフの3人である。

ブラゴイは養育者の老人が与えた教育について次のように推論している。

「もしタジートに無意識のうちに新しい性格が生じていたら，もちろん教師は気づかずにはいられなかっただろうし，もし教師がガスープのように思考し感じるなら，その新しい性格を抑えて絶やそうとしたのは言うまでもないだろう。もしそれに成功していなかったら，彼はタジートの父親に，頼まれたことを上首尾に果たしたとは言いもしなかっただろう。父親はタジートを見て次第に心配を募らせながら，『あるいは老人が俺をだましたのか』と自問している。しかし，プーシキンの描いたこの『厳かで静かな』老人がペテン師とはとても思えない。従って，タジートがそのような人間として父親の前に現れたのは，彼の『天分』の生まれつきの傾向だけでなく，教育の結果でもあることは疑いない。さらに言えば，『チェルケス人のキリスト教徒』をタジートではなく，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

彼の養育者に当てはめているレルネルはおそらく正しいだろう」[17]

ブラゴイが述べているように，タジートの人格は確かに「生まれつきの傾向だけでなく，教育の結果でもあることは疑いない」だろう。しかし，ブラゴイが言及しているレルネルは，養育者の老人を「チェルケス人のキリスト教徒」にあてはめているが，その根拠を示しておらず，[18] また，作品の清書稿と草稿にタジートあるいは養育者がキリスト教徒であったことを示唆する箇所はない。

この他，ハンムルザーエフは「養育者である老人の人物像と養育システムは謎である」としながらも，養育者の教育がタジートの身体的発達に貢献したことと，前者の教育の結果，後者が「善良で人間的で進歩的な考えの山の民に成長した」ことを述べている。[19]

ところで，里子生活でタジートが受けた教育の中身をプーシキンが作品で一切不明にしているのは，なにか必然性があったからではないだろうか。なぜなら，教育の内容を不明にすることで，一つに限定できない無限の解釈の可能性が生まれる。養育者の思想はガスープの思想と同じとも異なっていたとも推測できるし，また養育者の教育はタジートに感化を及ぼしたとも及ぼさなかったとも考えられるだろう。プーシキンは里子生活の中身を不明にすることで様々な可能性を含ませ，結果としてできあがったタジートの人格をそのまま読者に認めさせている。そして，プーシキンにとって大事なのは，タジートが受けた教育の中身ではなく，彼が13年間父親ガスープと暮らさなかったという出来事の方だったのではないだろうか。13年間の父子の別離は，タジートが父親と世界観を共有しない青年に育ったことを，起こり得る可能性が高い当然のこととして読者に受け入れさせるだろう。プーシキンが，タジートの生い立ちに山岳少数民族の里子制度を適用したことの創作意図は，その成育環境から親の影響力を排除し，主人公が親とは別の世界観の持ち主に育ったことを自然な筋の流れとするためではなかっただろうか。

（すぎの　ゆり・大阪外国語大学）

プーシキンの作品の引用は，*Пушкин. А. С.* Полн. собр. соч. М.; Л., Изд. АН СССР, 1937-1959 により，（　）内にローマ数字とアラビア数字で巻数と頁数を記す。邦訳は杉野による。木村彰一訳『エヴゲーニイ・オネーギン』，福岡星児訳『タジート』，神西清訳『百姓令嬢』（『プーシキン全集』2（1972），6（1974），4（1972），河出書房新社）を参考にした。（　）内のロシア語引用に相当する日本語訳に下線を施す。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

注

[1] フォンヴィージンは『親がかり』第5幕第1場で登場人物のスタロドゥームに「農奴の傅育係による教育は奴隷を二人作るようなもの」と語らせて，農奴が貴族の子弟教育に関わることを批判している。他方，プーシキンは『大尉の娘』で傅育係サヴェーリィチの肯定的な人物像を創造している。

[2] 浅岡宣彦氏は「プーシキンが1822年に弟レフに宛てて，『読書は最高の学問だよ』と書いているように，読書が主人公の知的発達に及ぼす影響を大変重要視していた」と述べている。浅岡宣彦「プーシキンの作品に見られる二つの傾向について」，國本哲男・法橋和彦編『プーシキン生誕180年記念論集』，1981，53。

[3] 浅岡宣彦「『タジート』を読む」，『むうざ』10（1991）：95-99を参照。

[4] *Благой Д. Д.* Творческий путь Пушкина. М., 1967. С. 384-395; *Анненков П. В.* Материалы для биографии А. С. Пушкина. М., 1984. С.214; *Комарович В. Л.* Вторая Кавказская поэма Пушкина // Пушкин: Временник Пушкинской комиссии. М.; Л., 1941. С.226-234.

[5] *Ханмурзаев Г. Г.* Особенности отражения национального характера горца и принципы его художественного раскрытия в поэме А. С. Пушкина «Тазит» // А. С. Пушкин и художественная культура Дагестана. Махачкала, 1988. С.33.

[6] *Турчанинов Г.* К изучению поэмы Пушкина «Тазит» // Русская литература. 1962. №1. С.42; *Комарович В. Л.* Вторая Кавказская поэма Пушкина. С.213, 219; *Лернер Н. О.* Библиотека великих писателей. Пушкин. Т. 6. Пг., 1915. С.459.

[7] *Белинский В. Г.* Сочинения Александра Пушкина. М., 1969. С.500.

[8] *Гуковский Г. А.* Пушкин и проблемы реалистического стиля. М., 1957. С.204; *Мейлах Б. С.* «...сквозь магический кристалл...». М., 1990. С.245-246.

[9] *Турбин В. Н.* Поэтика романа А. С. Пушкина «Евгений Онегин». М.: Изд-во Московского университета, 1996. С.80.

[10] 「僕が君のように詩人だったら，／タチヤーナを選ぶ。／オリガの顔には生命がない。／ヴァンダイクのマドンナそっくりだ」（В чертах у Ольги жизни нет. / Точь в точь в Вандиковой Мадоне）（VI, 53）について草稿では，以下二つの案が残されている。第1案：В чертах у Ольги мысли нет. / Как в Рафаелевой мадоне, / Румянец да невинный взор / Мне надоели с давних пор. —；第2案：В чертах у Ольги мысли нет, / Как у Рафаеля в мадоне. / Поверь — невинность это вздор / А приторной Памелы взор / Мне надоел и в Ричардсоне（VI, 575）．第1案でエヴゲーニイが退けている女性の美（румянец）が，「彼女は妹のように，美しさと／紅みをおびた初々しさによって／人の目を惹くことがなかった」（Ни свежестью ее румяной）（VI, 41）とオリガの美しさを意味していること，第1案のМне надоели с давних пор. — と第2案のМне надоел и в Ричардсоне が，「どんな小説にでも見つかるはず —— それは大

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

変かわいい。かっては私も好きだったが，つくづくいやになった」(Но надоел он мне безмерно) (VI, 41) の最後の詩行と響きあっていることから，感傷主義やロマン主義のオリガのような女主人公のタイプに批判的なプーシキンの気持ちがうかがえる。

[11] 第2章の内容は以下も参照。杉野「プーシキンの作品に見る女主人公の成育環境について」，『スラヴィアーナ』11 (1996)：3-13；*Сугино Ю.* К вопросу о среде и воспитании героинь в произведениях Пушкина // The Hannan Ronshu. Humanities & Natural Science. 34.2. (Sept. 1998).

[12] 例えば，J.-J. ルソーの『新エロイーズ』，N. カラムジンの『哀れなリーザ』と『貴族の娘ナターリヤ』，マルリンスキイの『ロマンとオリガ』で女主人公たちの裁縫する姿が描かれている。

[13] 田辺佐保子氏が，プーシキンの作品に父娘家庭の女主人公が多いことを指摘している。田辺佐保子「『ルサールカ』の誕生」，法橋和彦編著『プーシキン再読』，創元社，1987，123。

[14] 『ピョートル大帝の黒奴』の女主人公ナターリヤは，文盲で裁縫を日課としているが，外国嫌いの父親の意向に反して捕虜で障害者のスウェーデン士官からドイツ舞踊を習う (VIII, 19) という進取の精神の持ち主である。

[15] *Петрунина Н. Н.* О повести «Станционный смотритель» // Пушкин. Исследования и материалы. СПб., 1986. Т.12. С.84.

[16] 『書簡体小説の断章』でウラジーミルが田舎の令嬢を褒めて漏らす言葉「結婚するまでは母親に従い，結婚してからは夫の意見に従う似たりよったりの都会の美人」(VIII, 56) は，はからずも，娘の教育における母親の影響力の大きさとその教育の画一性を明らかにしている。

[17] *Благой Д. Д.* Творческий путь Пушкина. С.389-390.

[18] *Лернер Н. О.* Библиотека великих писателей. Пушкин. Т.6. С.458.

[19] *Ханмурзаев Г. Г.* Особенности отражения национального характера горца... С.30-31.

Юри СУГИНО

О формировании личности литературного героя в произведениях А. С. Пушкина (Татьяна Ларина и Тазит)

Процессы формирования личности Тазита в поэме «Тазит» и Татьяны Лариной в романе «Евгений Онегин» имеют сходство отчужденностью обоих героев от семьи и общины. Об одиночестве Тазита, который возвращается в родной аул после окончания «аталычества» (обычай кавказских горцев отдавать ребенка на воспитание в другие аулы), поэт пишет: «Но Тазит / Все дикость прежнюю хранит / Среди *родимого*

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Russian Scholars

аула / Он как *чужой* / ... / Так в сакле кормленый *олень* / Все в лес глядит» (в настоящем резюме все курсивы мои. — *Ю. С.*). Отчужденность же Татьяны от семьи выражена следующим образом: «Дика, печальна, молчалива, / Как *лань* лесная боязлива, / Она в семье своей *родной* / Казалась девочкой *чужой*». Как было сказано выше, Тазит и Татьяна сравниваются с чужими среди родных и с животными среди людей. Оба они являются исключительными существами в своей среде.

Кроме того, образование и воспитание Татьяны значительно отличается от стандартного образования молодых дворянок. Например, Татьяна не занимается шитьем, которое считается желательной для женщин работой и характерно для героинь литературы XVIII—начала XIX веков. Далее, Татьяна не подражает поведению матери в игре с куклою. Игра с куклою — это не что иное как подготовительное образование, в игре молодая дворянка обучается «законам света», чтобы стать благородной барышней. Таким образом, Татьяна отдаляется от общепринятой культурной нормы дворянского общества.

В начале развития сюжетов Пушкин ставит Тазита и Татьяну в положение отчужденности от родителей — носителей морали и светской нормы — и от общины, в которой стиль жизни и образ мыслей передаются из поколения в поколение. И тем самым поэт намекает на формирование самобытной личности героев и предсказывает их необычную судьбу в будущем. В основе мыслей Пушкина о формировании человека лежит мнение, что духовная независимость и незаурядные личные качества формируются в свободном развитии души и ума.

В данной работе мы ставим перед собой задачу установить, с какой целью Пушкин использует аталычество как способ воспитания Тазита. Долгая разлука героя с отцом во время аталычества наводит читателя на мысль о естественной разнице в мировоззрении юного Тазита и его отца. Нам представляется, что за этим скрывается авторский замысел устранить родительское влияние на Тазита и тем самым создать естественный сюжетный ход.

NII-Electronic Library Service